武雄市文化会館庭園説明

１．成立

武雄の中心にある御船山の東麓、旧武雄鍋島家敷地とその周辺の土地をもとに、昭和５０年［1975］、武雄市によって市民の憩いの場、文化の向上の場として整備される。

２．庭園の範囲

・開館当時の認識：南北、溝から塀（現在なし）。東西、奉安殿～蔵の前

【武雄市文化会館開館当初の「武雄領主鍋島庭園」】

・現在の認識　　：建物ライン～南側丘陵裾部の小川の間、黒門通、北側丘陵裾部

３．庭園の持つ役割　迎田緑地（約 2.8ha）の一部

建物南側・西側ライン～南丘陵トップ＋黒門通（駐車場の一部を含む）

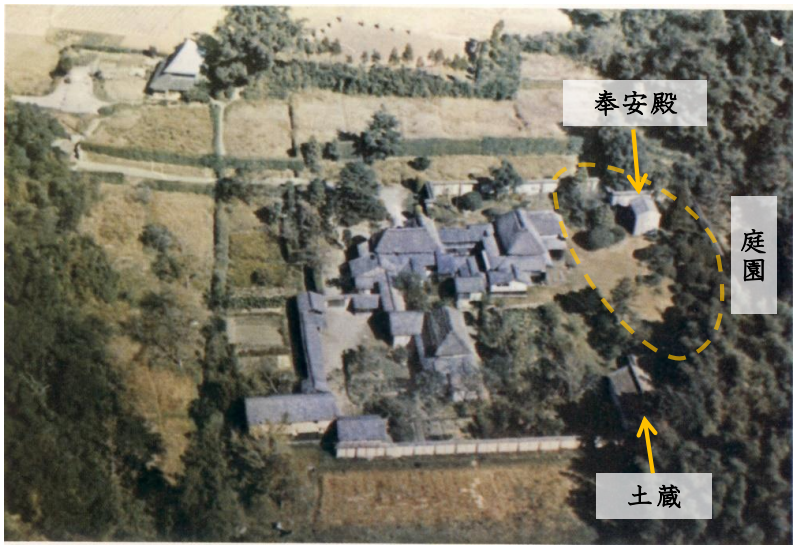
４．庭園の持つ歴史・文化的要素等

（１）　旧武雄邑主別邸と庭園

嘉永元年［1848］、鍋島茂義の隠居所として造営された武雄領主の別邸。土蔵は屋敷建設当初からある建物、何度か改修されている。鍋島家資料もここに保管されていた。

別邸の一角に造園された庭園が、現武雄市文化会館　集会棟・成人棟の南側の部分。屋敷の座敷からの眺めを重視した座観式庭園。

昭和 47 年に武雄鍋島邸が解体される前の写真と比較すると、サツキ植え込みの部分が以前のままに近い状態。文化会館として整備する際に、屋敷周辺にあった庭木を文化会館の敷地の各所に移植している。鍋島家からの名残りで、江戸時代に流行したツツジ・変わった葉っぱの植物など江戸園芸に起源がある植物がある。



【『武雄市史　中巻』より旧武雄鍋島邸】

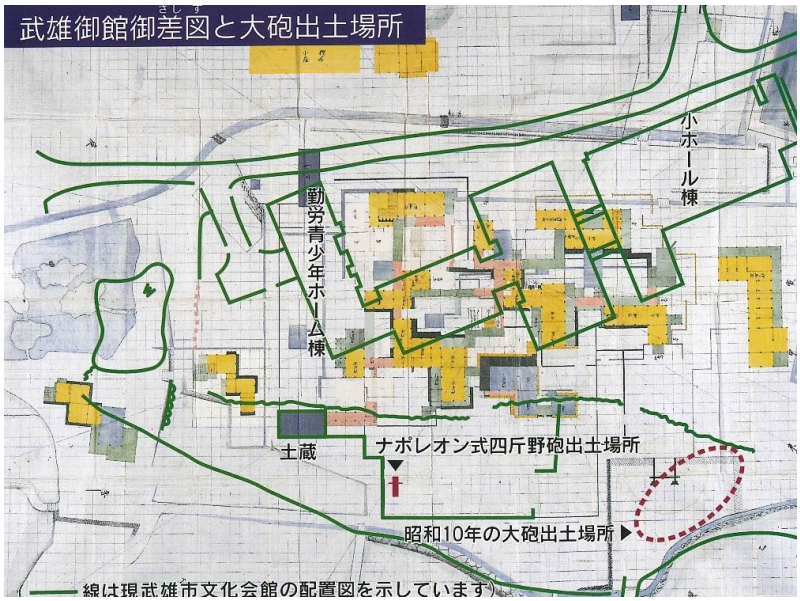
※　南側丘陵部は、旧武雄鍋島家時代は庭園の外であり、庭の空間のための緩衝地帯。
　　また別邸を守るための城壁の機能を持ち、攻めてきた敵の移動を阻む空堀がある。

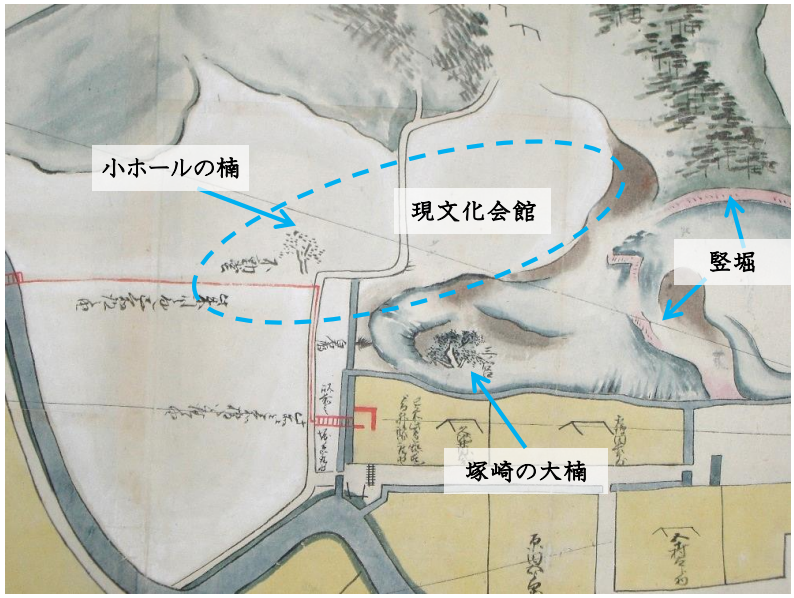
※　蔵の周囲の石垣、南側丘陵裾部の小川の護岸は別邸建設工事当時の江戸時代末期のもの。
※　庭の一角から、のちの国重要文化財の大砲が発見される。

（２）　武雄城跡

市天然記念物　塚崎の大楠のある丘陵は、中世　武雄領主が拠点とした武雄城跡の一角。敵の侵入を阻む城壁があり、敵の侵入を阻む竪堀が残る。

※　南側丘陵とともに傾斜が急で、基本散策する場所としては不向き。





【『武雄城下屋敷図』の文化会館周辺】

５．その他（文化会館敷地内）

（１）塚崎の大楠と
　　武雄神社　三ノ宮

塚崎の大楠は武雄市天然記念物。絵図によると大楠周辺は武雄神社の三ノ宮跡。

（２）さまざまな宗教関係物

馬頭観音、八天社、白石明神祠、奉安殿、（稲荷神社）

(3) さまざまな生き物の活動の場

イノシシ、野鳥、カスミサンショウウオ、ホタル等

６．庭園としての課題

・老木・弱った木がほとんど。庭木としての消滅の危機に瀕したものが多数。
→　移植に高いハードル。腐食した枝の落下は通常。倒木もあり。安全管理に課題。
・排水が極めて悪く、湿気が高い。
→　庭木へのダメージが大きい。寄生植物等の繁殖。加えて雨天時の歩道の水路化。
・池の陸地化、南側丘陵の小川周辺の護岸の崩壊、造形面での影響も深刻。
・温暖化した気候の影響を受けて、庭木の状態が悪化。シャクナゲの枯死。チリチリになる紅葉。
・「公園」としての管理内容のため、植物の生態サイクルで適切な時期・タイミングで庭園を管理することができず、加えて樹種の特性を無視した剪定で、「庭園」としての価値が著しく低下している。

７．その他の課題

歴史的・文化的ものが多いため、文化財の調査（城跡・屋敷跡などの埋蔵文化財調査等）が必要。

武雄市文化会館　庭園

桜1

イチョウ

桜2

紅葉

シャクナゲ

紅葉（黒門通り）

サツキ

雪景色

ホンキリシマ

フクレウバメガシ

ヒヨクヒバ

斑入りのナギ

スイリュウヒバ

シホウチク

オウゴンチャボヒバ

ホテイチク